Fort Clatsop

National Memorial
National Park Service
U.S. Department of the Interior

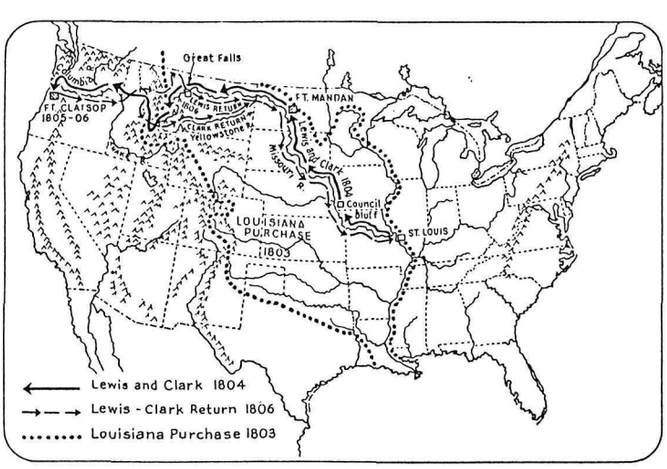
フォート・クラツォップ

メリーウェザー・ルイスとウィリアム・クラークが率いる探検隊は、太平洋を目指しミズーリ川を出発した長旅の末にこの地にたどり着き、1805年から1806年にかけての冬を過ごした。この旅の目的は、南のスペイン領と北のイギリス領（カナダ）の間に広がる北米大陸を横断し、アメリカ人として初めて北西部を実地に調査することであった。この探検の結果、猟師や開拓者がこの地に流れ込み、オレゴン領が形作られることになる。

当時の大統領トーマス・ジェファーソンは、ルイス隊長とクラーク隊長に次の点を調査するように命じた。

1．ミズーリ川の源流を突き止める。
2．太平洋への最短陸路を発見する。
3．科学的、地理的観測をする。
4．インディアン種族に交易と平和を目的としたアメリカの威厳と力を示す。

1804年５月、長さ17メートルの大型平底船１そうと、カヌー式の小舟２そうに乗り込んだ総勢45名の探検隊は、セントルイス市近くのミズーリ川河口を出発した。５カ月にわたる単調な旅の末、河口から2,600メートル上流のマンダン・インディアン村に着き、ここに砦を築いて最初の冬を過ごした。一行はここで近くのミネタレー村に住むフランス系カナダ人とインディアンの混血トゥサン・シャルボノーと知り合い、シャルボノーは通訳として、ショショネ族出身の若い妻サカジャウェアと赤ん坊の息子を連れて探検隊に参加することになる。（サカジャウェアの銅像がポートランドのワシントン・パークにある。）



1805年４月７日探検隊とシャルボノー一家は、小舟２そうと、カヌー６そうに乗ってマンダン砦を後にし、未開の地へ向けさらにミズーリ川の支流を遡った。源流近くで船を降り、その後は船を隠して徒歩で探検を続けた。

サカジャウェアの家族が用意してくれた何頭かの馬と「オールド・トビー」と呼ばれる案内人と共に、ロッキー山脈越えの厳しい旅が始まった。アイダホ州のクリアーウォーター川では川を下るためにカヌーを作った。カヌーに乗って約970キロ。スネーク川、コロンビア川を下り、1805年11月、遂に現在のワシントン州マックゴワン市近くで太平洋を見た。

約10日間北岸で嵐に閉じ込められた後、一行はエルク（大鹿）が豊富に住むといわれる対岸に移動することにした。まずルイス隊長をはじめとする先発隊が対岸にわたり、冬を越す食料として十分な獲物が住み、塩の補給ができる場所を探した。1805年12月８日、ネタール・クリーク（現在のルイス・アンド・クラーク川）の３マイル（約4,8キロ）上流に砦の建設を開始。クリスマス・イブまでには人々が住めるまでになった。一行は、この砦を友好的な地元インディアン族の名前にちなんで「フォート・クラツォップ（クラツォップ砦）」と名付け、ここで３カ月間を過ごした。

フォート・クラツォップでの生活

ルイス隊長とクラーク隊長率いる探検隊は、1805年12月７日から翌年３月23日までをここフォート・クラツォップで過ごした。ここで両隊長は旅行中の日記を書き直し、科学的データに関する報告をまとめた。またクラーク隊長は、この探検の最大の成果となった数々の地図をまとめたが、中にはインディアンから得た情報だけに基づいて描かれたものもあった。なおこれらの地図により、通ってきた道

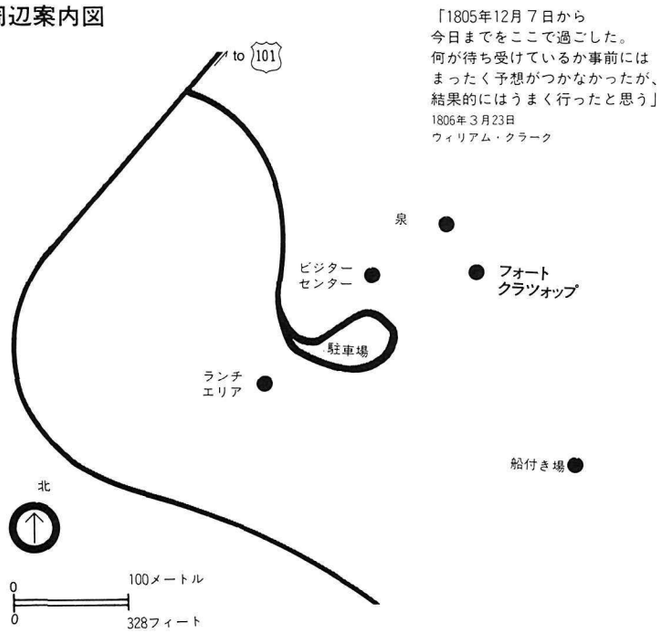
が最良の道ではなかったことが分かり、帰りは行きと一部違う道を通ることを決定する。

クラーク隊長の日記によると、インディアンたちはとても商売上手で、ほとんど毎日取引のために砦を訪れた。このため探検隊が用意してきた品物はあっという間に底を着いてしまった。インディアンはカワウソの皮、アザラシの肉、魚、植物の根、エルクの肉、カヌーなどを取引に使った。（ここに住むインディアン達はすでにヨーロッパ人との接触があり、商売上手なのはそのためだった。）ルイス隊長とクラーク隊長の日記には、しばしばインディアンの種族、外見、習慣、生活環境、住居、漁や猟のやり方などについて記されている。これらの日記は、種族が途絶えたインディアンに関する記録として、現在でも貴重な資料となっている。

探検隊の男はすべて狩りをし、わな猟をした。中でもジョージ・ドロイラードという隊員はたいへん狩りがうまく、その腕前は隊長から高く評価されていた。エルクが131頭、鹿が20頭、それにカワウソ、ビーバー、アライグマなどの小動物が何匹か一行の食料になった。そして春が来た。エルクが丘の向こうに移動してしまったため、食用や衣料用の肉や皮を補給するのが困難になってきた。

探検隊が滞在した106日中、雨が降らなかった日はわずか12日間だけであり、ここでの生活は決して快適なものではなかった。湿気のため衣類は腐り、毛皮や皮製の寝具にはノミが繁殖した。実際このノミの被害はひどく、日記にもたびたび一晩中眠れなかったと記されている。この湿気のためほとんど全員がリューマチや風邪にかかり、さらに別の病気にかかる者もいた。また肩の脱臼、足のけが、背中の痛みを訴える者もいた。クラーク隊長は精力的にこれら病人の治療に当った。
このような逆境の中で、隊員達は家族や友達、富や名声の待つ家路に着く用意を続けていた。隊員の中には家に帰らず、「野生」を選ぶ者もあったが、全員がすばらしい探検家として、輝かしい業績を歴史に残した。インディアン、黒人、白人、男、女・・・人種、性別を越えて結び着いたこの探検隊にとって、この素晴らしい大陸横断の冒険は死ぬまで鮮やかな思い出として残った。彼らこそ本当の探検隊であった。

周辺案内図



Fort 砦

フォート・クラツォップは、柵に囲まれた50フィート（約15メートル）四方の砦で、深い松林の中に建てられていた。住居は２列に分れ（西側に３室、東側に４室）、その間に全員の集合する場所があった。

メリーウェザー・ルイス隊長とウィリアム・クラーク隊長は地図と日記の編さん、砦の日常管理などに当たり、砦内のほとんどの活動が両隊長の部屋を中心に行なわれた。

シャルボノーの部屋は隊長室の南側にあり、シャルボノー、その妻サカジャウェア、赤ん坊のジーン・バプティストはこの部屋でひと冬を過ごした。

見張り室は、肉貯蔵室および隊長室へ通じるドアの外にあった。見張り人の役目は、１日に最低１回肉の保存状態をチェックすること、また毎日カヌーの数を点検し、夜には日中の訪問者が砦内に残っていないかを点検することであった。

Spring 泉

隊員のひとり、パトリック・ガス軍曹は手記に「砦の周りは深い松林だ。土壌は肥沃だが、深さはあまりない。あちこちに無数のわき水が流れている」と書いている。そのうちのひとつ、砦の約46メートル後方にあった泉が、人々の飲料水の源になっていたと思われる。

Canoe Landing 船付き場

考証によると、ここが探検隊が1805年12月７日に初めて上陸した場所であろうと思われる。ルイス、クラーク両隊長の日記には、当時この一体は広大な沼地で、このネタル・クリーク（現在はルイス・アンド・クラーク川と呼ばれる）から砦までは約183メートルあった、とある。

狩猟や探索に使われていないとき、５そうのカヌーは、船付き場の南にある小さな泥沼につながれていた。現在この場所では、わな作りやカヌー作りの実演が行なわれている。

Translation: Cultural Homestay Institute, Portland
Editting/Typesetting: Japan Pacific Publications, Inc., Seattle